SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

The Acquisition of English Verb Transitivity and Intransitivity and the Effects of Explicit Grammar Instruction by Japanese Learners of English :Focusing on English Ergative Verb Structures

メタデータ	言語: English 出版者: Shizuoka University 公開日: 2019-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Otaki, Ayano メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026693

（課程博士・様式７）（Doctoral degree with coursework，Form 7）

学 位 論 文 要 旨

Summary of doctoral dissertation

専　　攻：　教科開発学　　氏　名：大瀧　綾乃
Course：Subject Development　　Name：OTAKI Ayano

論文題目：日本語母語話者による英語の動詞の自他動性の習得と指導の効果検証
－ 英語能格動詞に焦点をあてて －

Title of dissertation：The Acquisition of English Verb Transitivity and Intransitivity and the Effects of Explicit Grammar Instruction by Japanese Learners of English
: Focusing on English Ergative Verb Structures

論文要旨：

Summary：

本博士論文の目的は、中学・高等学校６年間の英語教育をとおし、「研究目的①」日本語を母語(L1）とする英語学習者（以下 JLEs）が、英語の動詞の自動詞性と他動詞性の相違をどの程度身についているのかを調査することである。そして「研究目的②」自他動性の習得が困難な動詞があればそれはなぜかを追求する。さらに、「研究目的③」その研究成果をもとに JLEs の英語教育環境に適した動詞の効果的な指導方法を提示する。

JLEs の発話を観察すると、誤りのタイプとして、基本的に自動詞として用いる非能格動詞 (e.g., *appear, come, die*) を、**Taro happened the accident* と誤って他動詞用法を文法的に正しいと判断する (e.g., Kondo & Shirahata, 2015a, 2015b)、または **A pen was appeared* のように、他動詞用法にて用いられる受動態のルールを自動詞用法に適用して産出するものがある (e.g., Zobl, 1989)。自動詞・他動詞用法ともに使われる能格動詞においては、日本語にも自動詞用法（窓が開いた (= *The window opened*)）が存在するにも関わらず、多くの JLEs は英語能格動詞の自動詞用法（*The window opened*）は文法的に不適格であると捉え *The window was opened* のように受動態を選ぶ傾向にある。これまでの研究では、JLEs を含めた第二言語（L2）学習者による英語能格動詞の習得については詳しく調べられていない。そこで本博士論文では、英語能格動詞に焦点をあて、このような誤りをする理由を考察し、それらの考察に基づいた明示的文法指導の効果を検証した。

本博士論文の目的を達成するため、教科開発学の枠組みの中で、生成文法理論に基づく L2 習得を基盤に２種類の実験を行った (Study 1, Study 2) 。Study 1 では、「研究目的①」および「研究目的②」を達成するため、JLEs による英語能格動詞構造の習得について、大学 1、2 年生を対象に文法判断性タスク（GJT）を用いて調査した。調査結果に基づき、JLEs による英語能

格動詞の習得に影響を与える要因を、主に L1 転移と主語名詞の有生性 (animacy) という 2 つの観点より考察した。Study 2 では「研究目的③」を達成するため、Study 1 での考察をもとに、習得困難な動詞について、大学生 1 年生を対象に明示的文法指導を行い、その効果を検証した。指導前・直後・指導 13 週後の計 3 回 にわたり、実験参加者に動詞の習得状況を把握するため GJT を実施した。明示的文法指導が効果的であるか否か、そしてその理由を議論し、JLEs に効果的な明示的文法指導の内容と方法を提示した。

Study 1 の結果、「研究目的①」に対する結論として、JLEs は L1 転移による影響を強く受けておらず、自動詞用法の方を他動詞用法よりも誤りであると判断する傾向があることがわかった。一方で、主語名詞句の有生性は、JLEs の英語能格動詞の構造の解釈に影響を与えており、無生物名詞の主語を伴った文の方が、有生物名詞を伴った文よりも文法性を正しく判断することが困難であった。特に、自動詞用法で無生物主語を伴った文 (e.g., *The can opened easily*) の文法性判断が困難となり、多くの JLEs が受動態の文 (e.g., *The can was opened easily*) に修正しようとする傾向にあった。その要因として、つまり「研究目的②」に対する結論として、JLEs は、無生物主語は動詞の行為を引き起こすことができないと捉え、文の外側から動詞の行為を引き起こす物体を探し、受動態にすることが考えられる。よって、主語の意味役割は常に行為者(Agent)であるという、“the Agent First Principle” (Jackendoff, 2002) が、能格動詞構造の解釈に影響を与えると考察した。そして、他動詞用法の主語の意味役割（Agent）と自動詞用法の主語の意味役割(Theme, Patient) を正しく理解することができるようになることが、学習者の英語習熟度に影響を与えると考えられる。

Study 1 の結果と考察に基づき、Study 2 では次の 2 点に焦点を当てて明示的文法指導を行った。第 1 点目は、能格動詞の統語構造への気づきを促す指導、即ち、英語能格動詞は他動詞用法と自動詞用法があるという知識を、日本語の能格動詞の統語構造と比較することで明示的に教えることである。第 2 点目は、主語の意味特性に関する気づきを促す指導である。即ち、英語能格動詞を用いた文は両用法ともに有生物でも無生物でも主語になりうるという知識を教えることである。このような統語構造と主語の意味特性を強調した明示的文法指導方法は、著者の知る限り存在しない。Study 2 の結果、JLEs は指導前 GJT よりも指導直後の GJT の方が、能格動詞の用法の全ての文のタイプの文法性を正しく判断できる割合が高まり、且つその割合を、指導 13 週間後に実施した GJT まで保持することがわかった。したがって、本明示的文法指導は、能格動詞の用法における全ての文のタイプに対して効果的であり、その効果は、指導直後だけではなく、指導 13 週間も保持できたと言える。

「研究目的③」に対する結論として、本博士論文で行った明示的文法指導は、能格動詞の自動詞用法と他動詞用法の両用法への「気づき」と「理解」を高めるために有効であることがわかった。そして明示的文法指導は、「明示的文法指導が効果的な文法項目」（白畑, 2015）の特徴に当てはまる文法規則に有効であることが確認された。したがって本博士論文は、授業時間などの様々な制限のある教室環境において、明示的文法指導の有効性を再考する必要性を提示した。